

# 布志名焼 — 色絵の世界 —

松江市南方の宍道湖岸にある布志名の地では、江戸時代後期から本格的に焼物の生産が始まりました。

松江藩七代藩主で大名茶人として著名な松平不昧は、土屋雲善窯を御用窯とします。雲善窯は周辺の窯とともに布志名焼の名で知られました。この布志名焼と市内にある楽山焼が出雲地方を代表する伝統的な窯です。

布志名焼では伸びのいい良質の陶土を用いて、茶道具をはじめ食器など多彩な焼物を焼成します。色絵で加飾をした華やいだ意匠のものも多く、模様には京焼や織部焼の影響も見受けられます。

布志名焼では織部写の茶碗や鉢、皿が製作され御詔下図帖には種々の変形皿がたくさん記録されている。このタイプは大小2種類が知られる。四足が付く。



織部写四方鉢



色絵秋草杯洗

宴会で返杯する際に杯をすすぐための水を入れて使う器。外側には黄釉の地に菊やススキなど、一群の秋草を鮮やかに描き内側の見込みには水草に金魚を配し泳ぐ様を想わせる。



色絵紅葉唐草図四段重

各段は、一様に緑の唐草文の地に赤色の紅葉を配し、華やかな四段重である。布志名焼では大きさや図柄などの異なるさまざまな重箱が作られており、祝いの場面などで重宝されたと見られる。箱書に「文久三年」と記される。

布志名焼の特徴である黄釉の器胎に全面にわたって鮮やかな花唐草の文様を絵付けする。様々な形態の花瓶が作られる中で、本作では長頸瓶に華奢な把手が付く。



色絵花唐草図手付花瓶

赤い釉色がひととき綺麗な甕である。花卉文と雲文が赤と緑釉でバランスよく配置され口部の内外には飾り文を回らせている。



色絵草花に雲文散らし水屋甕